
魔法少女リリカルなのは 喫茶店マテリアルズ

和利夫

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのは 喫茶店マテリアルズ

【Nコード】

N0808Y

【作者名】

和利夫

【あらすじ】

都市グラナガンから少し離れた場所。そこに喫茶店『マテリアルズ』という店がある。店主は元時空管理局の隊員であった。だが、娘達が出来てから戦う事をやめ、この喫茶店を開き、娘達と共に日常を生きようと決める。この話はそんな店主と娘達の日常を描いたお話。

第一話 喫茶店『マティアルズ』（前書き）

マテリア三人娘の話が書きたい！

って訳でこんなのを書いてしまった。

第一話 喫茶店『マテリアルズ』

ミッドチルダ。

いくつもある次元世界の中心地と呼ばれる世界。そこは『魔法』がある世界。この世界に生まれし人々はそんな魔法の恩恵を受けて日々を生活している。

そんな世界の中心部グラナガンの都市から少しだけ離れた場所に俺は住んでいる。

『マテリアルズ』

そんな名前の喫茶店。その店長である俺、ギンザン・イツキは27歳、独身。

そしてあるうことが独身でありながらひよんな事から娘達の父親をやらせてもらっている。

「パパ！ お皿運んできたー！」

「ほい。んじゃ、これを2番テーブルな」

「わかった〜」

さて、この元気に店の手伝いをしてくれるのは娘の一人である。

名前はレヴィ。ちゃんとした名前？があるのだが、名前ぼく無し、なんか長かったから俺はレヴィと読んでいる。

長い青髪をツインテールでまとめ、活発に動き回るのが特徴。素直でいい子なのであるが馬鹿っぽい。と言つか、馬鹿な子である。最近やつと算数の足し算、引き算を覚えたくらいだ。

「パパ？ 何か言った？」

「なんにも言っていないぞ。ほら、早く運ぶ」

「はい」

おっと、意外と勘が冴えているのでうかつにこんな事を思っただけなのだった。たまにコイツは人の心を読んでいるのではと見える。

「父上、この世に生まれる人間の心を現すかのように汚れきった皿やコップを洗い終わりました」

「ん、ありがとう」

「はい」

俺がカウンターでお客様に出すコーヒーを作っていると隣で洗い物をしていた少女がそう報告しに来る。

ちなみにこの子は俺の二人目の娘、シュテルと言う。ちゃんとした名前が（以下略）

レヴィとは対極的で外見の割りには落ち着いた性格をしている。たまに物騒な物言いをするがそこは気にしたらキリが無いのでスル

「する事を勧めるぞ。もちろん、これからちゃんとした教育はするつもりだが……………」。

「でしたら、いつものを所望いたします」

「はいはい。エライエライ」

トテトテと俺の足元まで近づいてくる少女は自分の頭を差し出し、「またか」と内心思いながら俺は彼女の頭を撫でてあげた。よっほど嬉しいのか、無感情だった表情は一瞬にして和らいでしまうのである。

「あー！ シュテル！ 貴様！ 何、親父どのにいい子いい子されておるか！？」

「うわっ！ 馬鹿野郎！ ひつつくな！ コーヒーがこぼれる！」

「ずるいぞ！ 我とて親父どののために頑張っているのだ！ それなりのほつびを所望する！」

「わかったから！ わかったから！ とりあえず、腕にぶら下がるな！」

「おお〜！ これは意外とおもしろいぞ〜」

さてはて、現在俺の腕にぶら下がるこの少女の名をディアと言う。ちゃんとした（以下略）

いかにも俺様な性格をしており、負けず嫌いで無駄にプライドが高い。だが、意外と娘の中でしたっけりして面倒見も良いので子育て経験が初めての俺としては助かったりしている。

「わー！ 僕も僕も！！」

「おい、塵芥。今は我が親父どのにほうびを要求しているのだぞ！
あとにせい！」

「ディア、ずるいです。でしたら、私は父上の腕に抱かれます」
ディアが騒いでいると他の二人も俺にひつついて来た。

右腕にはディア。

右足にはレヴィ。

左足にはシュテル。

唯一残っている左手はお客に出すコーヒーを持っていたためにそれを払う事も出来ず、どうする事も出来ない。

いや、一つだけ方法があるか……………。

「いい加減にしないと三時のおやつは無し！！」

「……わー！ それだけはご勘弁を！！」「……」

大抵三人が言う事を聞かない時はこれで何とかなったりする。

なんだかんだでやっぱり子供なのだ。三時のおやつをよほど楽しみにしているようでそれを取り上げられると言う事は奈落の底に落とされるにも等しいらしい。

なので皆、一目散に各々の仕事に戻って行った。

この後コーヒーを差し出したお客に笑われたのは言うまでもない。

「はぁー……………騒がしいたらありやしねえ」

まあ、コイツ等が家に来てからそんな日常が気に入っている訳なのだが。恥ずかしいので絶対にコイツ等の前では言わない。

絶対にだ。

言ったら言ったで変に騒ぐから嫌なのだ。

「パパー！ ちゅうもーん！」

「はいはい……………って！ 字が汚くて読めねえー！」

レヴィイから手渡された伝票を見て見ると意味不明な文字が書かれていた。いや、もはやこれは何かの模様の様である。

「レヴィイはもっと字の練習をしなさい」

「これは酷過ぎる……………」

そんなレヴィイの伝票を見たシュテルとディアも呆れかえってしまっている。

「なにをー！ 読めるもん！」

「じゃ、読んでみる」

「……………ゴーヤチャンプル」

「まさかの地球料理！？ そんなメニューはウチにはございません！」

「だってそう頼んできたもん！」

「嘘を言うな！」

ベシツとくだらない嘘を言うレヴィにチョップを食らわすとレヴィは泣きながらもう一度お客に注文を取りに行った。

「やっぱり、レヴィにはホールの手伝いをさせたのが間違이었다のだろうか？」

「今更です。父上」

「ですよね〜」

と言ってもレヴィの奴は体を動かしていないと気が済まないのか、ジツとしている事が出来ない。お客もお客で元気のレヴィの姿を見て微笑ましく思っているらしいので別に気にはしないが

「お客が来ませんね。父上」

「そうだな」

シュテルが店の扉も見つめながらそう言ってくる。

「ひーまー」

「そうだな」

レヴィは店の長椅子に寝っ転がりながらだらしなく言ってくる。

「ふん！ 我の料理が食せぬと言つのか！ 所詮、民衆にはわからぬ味だつたか」

「そうだな」

ディアは一人で腕組しながら何か偉そうに言っている。

「……………」

それにしても暇である。

時刻は3時過ぎ。いつもならそれなりの人達がチラホラと店にやって来るのだが今日に限ってそれが無い。まあ、たまにはこういう日があると俺は一人納得し、座っていた椅子から立ち上がり娘達に告げる。

「オヤツにするか」

「「「!?!?!」」」

予想通りの反応である。三人共その言葉を耳にすると目を見開いて俺の方を見て来るのであった。

「店のやつだが………まあ、いいだろ。ホラ、ショーケースから一つ選んで来い」

「「「はい!?!?!」」」

さて、客足が落ち着いて来た時間帯。と言うか店内にはお客がない状態。

本来ならお客が座るためのカウンター席に右からシュテル、ディア、レヴィの三人娘が座っていた。

「んじゃ。シュテルは毎のショートケーキだったな」

「はい、ありがとうございます」

「ディアがチーズケーキと」

「ふむ、待っておった!?!」

「んで、レヴィがモンブラン」

「わーい!?! モンブラン」

三者三様の喜び様。目の前に差し出されたおやつに三人は目をキ

ラキラと輝かせている。

「飲み物はアップルティーだからな。熱いから気を付けろよ」

「「「はい」」」

まったく、こつ言う時だけは素直に言う事を聞くのだな。

「父上は食べないのですか？」

「あん？ いや、溜まった洗い物が終わったら一息入れるよ。って、レヴィ。もっと行儀良く食べれないのか？」

「ふえ？」

気付けばレヴィの皿の周りにはケーキの食べ屑が散乱していた。よほど乱暴に食べたのかケーキの原型は滅茶苦茶になっており、レヴィ自身の口の周りにはクリームが着いている。

「ホラ。ジツとしている」

「ん~~~~」

あまりにもみっともないので俺はナプキンでレヴィの口周りを綺麗にしてあげること。

「パパ、ありがとうー」

「次からもっと綺麗に食べる」

「はい」

と、いい返事をするもまた乱暴にケーキを食べ始めるのだった。

まったく学習能力が無い奴である。シュテルやディアの様に綺麗に食べる事は出来ないのだろうか。いや、こいつにそれを求めるのは酷な話だな。

「くっ、その手があったかつ」

「侮れませんね。レヴィ……………」

何を言っているのだろうか。ってか、さっきまで綺麗に食べてたのになんでわざわざ行儀悪く喰い始める？

「親父どの！ 口の周りを汚してしまった。取れ！」

「父上。私も」

「……………」

シュテルはともかくディアはなんか偉そうである。だが、さすがにこのままにして置く事も出来ないのでナプキンで二人の口の周りを拭いてやることにした。

さて、二人の口周りが綺麗になった所で洗い物を再開。こんなことなら暇だと感じた時に済ませておけばよかった。

「ち、父上」

「あん？」

洗い物をしている途中。突如シユテルが俺を呼ぶ。そして、いつもは落ち着いた物言いをするのだが、その時は珍しく言葉を詰まらせながらモジモジしていた。

「良ければ一口、どうぞ」

「お、いいのか？」

「はい」

ああ、シユテル。普段は物騒な言動ばかりではあるがこんなにも人に気遣えるいい子に育っているのだな。

父さん感激。

「では、あ〜ん」

「なんだ？ 食べさせてくれるのか？」

シユテルは自分のフォークでケーキを一口サイズに切り、それを俺に差し出す。どうやら、洗い物で手が使えないのを気遣ってくれたのだろう。うんうん、やっぱりいい子だ。

「あ〜ん」

「……………」

「うん、作った自分で言うのもアレだが、やっぱりうまいな。って、

どうしたんだ？ シュテル？」

「……………いえ、なんでもありません」

差し出されたフォークに乗ったケーキを食べ、その味に絶賛してしまう。これでも十分だと思いつつも今度はクリームを変えてみるか思考を巡らす。

しかし、シュテルは何故か頬を赤くして俯いてしまっていた。いくら父親でもさすがに「あ〜ん」は無かったか？ だが、小さくガツツポーズをしているのは何故だろうか？

「……………シュテル、貴様」

「むー」

そんなシュテルの様子をジド目で見ている二人は何やら不服そうだった。

「さて、俺も一息入れるかな〜」

この後ディアとレヴィイからケーキのおすそ分けをしつこくもらうことになる。

「ごちそうさまです。

オヤツを食べ終えた娘三人は満腹の所為か今はお昼寝中。正確にはもう夕方なのだがそんな事は関係ないらしい。

食べて、遊んで、寝る。まさに子供の三大特権である。幸いこの店は俺の家も兼ねている。一階が喫茶店。二階が家と言った感じに。なので、娘達の世話にはさほど困る事もない。

「お待たせしました。ご注文の品です」

夕方にもなれば学校帰りの学生や仕事で一息入れにこの店に来る人も現れる。ピーク時よりは落ち着いている物のやはり、一人で全てをやるには忙しい。

「バイトでも雇うかな。いや、必要無いか」

「マスター。ただいま帰りました」

「おう、おかえり」

微妙ではあるが若干の活気がある店内。そこに一人の少女が入ってきて来る。

腰まで伸びた銀の髪。シユテルとは違う落ち着いた雰囲気を持つ少女。服装は近くのザンクト・ヒルデ魔法学院中等科の制服を着ており、手には学生鞆を持っている。

「レグナ。悪いが、店の手伝いをしてくれないか？ 一人だどうにも手が回らん」

「了解しました。すぐに準備を」

レグナと呼ばれた少女はそのまま二階へと上がり、すぐに下へ降りてくる。鞆だけを部屋に置いて来たのか服装は制服のまま、それにイソイソと前掛けエプロンを掛けて手伝う準備をしている。

さて、このレグナと呼ばれる少女は三人娘と同様に俺の娘である。が、本人は俺の事を『父』としてではなく、『使えるべき人』と認識しており、三人のような娘と呼べない。まあ、それでも俺の家族には変わらないのだが。

なにげにこの子に「お父さん」と呼んでもらえる事が夢だったりするのは秘密だ。

「お待たせしました」

「ほい、3番にコレな」

「はい。あ、いらっしやいませ」

愛想は無いがミスも無く接客をこなすレグナ。何気にその落ち着いた雰囲気が高評価なのか客も何も言わないので特に問題視もしていない。

「レ、レグナさん！ 今日美しいですね！」

「??？ ありがとうございます」

と言うかレグナがホールに出ると変な客が増える。主に男性。同

じ学校の生徒だったり、どこの若者からおっさんまで。

ハッキリ言おう！ レグナはかなりの美少女であると！

なのでここに来る大半の男性はレグナ目的だったりする。夕チが悪いのは最初に飲み物を注文して閉店まで居座るような輩がいる事。一度、最近流行りの『おはなし』をしてみようかとさえ思えてくる。

「マスター。どうかされましたか？」

「ん？ いや、新手の呪詛でもあればな〜と考えていただけだ」

「はぁ……………？」

しかし、レグナは自覚が無いのかこの集団が何故店に来るのがわかっていないらしい。いい感じで朴念仁なのである。

「親父どの……………」

「つと、なんだディア。起きたのか？」

「ん……………」

まだ眠気が取れていないのか目をゴシゴシと擦りながら店へと降りてくるディア。

「あーあーあんまり目を擦るなよ。後で痛くなるぞ？」

「……………だっ」

「はあ？」

「だっこ」

「こう言う時のディアはいつもと違ってかなり甘えん坊になる。現に今も両手を突き出して抱っこをねだって来ている。」

「ふー……………よいつしょ。って、抱っこした瞬間また眠るのかよ」

「すーすー……………」

「マスター。なんでしたら私が寝かしつけて来ます」

「いや、もう飯にするから皆起こして来てくれ。まあ、ぐずってすぐには起きないと思うけど」

「はい」

レグナからの嬉しい申し出を受け、俺はそつと寝ているディアをレグナに受け渡す。

「……………おお……………」

そんな様子を見ていたレグナ目的の男性陣から妙な声が漏れる。

「美しい。まるで我が子を抱く女神の様だ」

「結婚したらああいう嫁さんが欲しい」

「……ってか、お義父さん。娘さんください！」

まあ、そんな気持ちになるのもわかる。四人の娘を持ちながら結婚経験が無い俺としてはああいう奥さんを持ちたいと思う。

だが、全員表に出る！ 『おはなし』の時間だ！ 特に最後の奴！ テメエは念入りにだ！

「マスター？」

「ん？ あ、いや。なんでも無いぞ。ディアを頼む」

「はい」

レグナはディアを抱えて二階に上がるのであった。それを見ていた野郎どもはとても残念そうな表情をしている。

しかし、そんな表情もつかの間。レグナが姿を消した途端に野郎たちの表情は真剣な物になる。もちろん、俺を含めて。

「……………さて、お前等。覚悟は出来ているんだろうな？」

「ここ『マテリアルズ』にはとある掟が存在する。

「き、今日こそは！！」

「あなたを倒してレグナさんを手に入れる！！」

「覚悟！ お義父さん！！」

「誰がお義父だああああ！！」

その掟とは『娘が欲しくば俺を倒せ』

いたってシンプルで馬鹿にも理解できる掟。

そして、始まるのは死闘。店内に結界を張り、外装が壊れないようにする。もちろん上に居るレグナ達に気付かれないように防音、振動も外に漏れないようにしてある。

己の願望を叶えるために俺と言う壁を乗り越えて行くこととする男達。その姿はさしずめ勇者である。そこは称賛しよう。だが、この壁を乗り越えるのは一筋縄ではいかないと言う事を教えてやる。

「娘は渡さーん！ー！」

今思えばどうしてこうなったのだろうと思う。が、気にしない。

「？ マスター。お客様はお帰りになられましたか？」

「ああ……………皆、帰ったよ……………」

「……………すみません。もう少し早く来れば手伝いを」

「いや、大丈夫だ。これだけは……………俺が何とかしなくちゃ、いけなかったから……………それより、皆起きたか？」

「?? はい」

今回の相手はなかなか強かった。まさか、オリジナルのデバイス持ちまでいるとはさすがに思わなかったぞ。なんだよ、最近のデバイスは携帯感覚で誰でも持てる物なのか？

それよりこんな相手にしてたらさすがにこっちの身が持たない。これは早急に対策を取らなければ……。

「パー！ お腹減った」

「へいへい、でもまだ出来ないからレグナと一緒に外の看板をしまつてくれ」

「はい」

一眠り済ますとやたら元気になるレヴィ。姿を現さないシユテルとディアはまだ寝ぼけているのだろうか？ まあ、飯が出来る頃には目を覚ますだろう。

「レグナ。僕も片付け手伝うぞー」

「ありがとうございます。では、そっちの掃除をお願いします」

「わかったー」

今日の営業も無事に乗り越えた俺達は店の片付けを始める。って、言っても俺は皆の晩飯を作るのに手が離せず、片付けはレグナとレヴィの二人がやってくれている。

それがいつも通りの一日の終わり。

後は飯を食って、風呂に入って、ちょっと遊んでまた寝るだけ。目が覚めればまた一日の始まって、また似たような日常を繰り返す。

「うっし！ こんなもんか。おい！ シュテルとディアを呼んで来てくれー」

「はい」

「レグナ。皿を並べるの手伝ってくれ」

「はい」

俺はそんな日常が好きである。だが一見同じような日常でもコイツ等のおかげで少し変わって見えたりする。その変化を見つけて笑ったり、泣いたり、怒ったり、様々な感情が現れる。

まあ、そんなこんながこの喫茶店『マテリアルズ』の日常。

どこにでもいる家族が経営する喫茶店の風景である

第一話 喫茶店『マテリアルズ』（後書き）

物語の時期的にはVivioです。

なんの事件も無さそうだし、書きやすいんじゃないかねえ？というたっただけの案です。

後、マテリアルズとギンザンの出会いとかはこれから物語が進むにつれて書こうと思います。

感想とかありましたらお待ちしておりますね。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0808y/>

魔法少女リリカルなのは 喫茶店マテリアルズ

2011年10月31日01時24分発行